

大学生を対象とした記憶に残る風景に関する研究

鯨坂 健太¹・星野 裕司²・増山 晃太³

¹学生会員 熊本大学大学院自然科学教育部
(〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号, E-mail:207d2216@st.kumamoto-u.ac.jp)

²正会員 熊本大学 准教授 くまもと水循環・減災センター
(〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39番1号, E-mail:hoshino@kumamoto-u.ac.jp)

³正会員 風景工房
(〒860-0862 熊本県熊本市中央区黒髪5丁目27番2号, E-mail:masuyama.kota@gmail.com)

本研究では、個人的な風景に着目し、生活環境のなかで見られる風景に関するレポートを分析することで、印象に残った風景の特徴を明らかにしようとした。大学生を対象に、一番の思い出となっている身近な風景をスケッチと文章で表現したレポートを分析した。その結果、風景を表現する視点、風景を見る時間や頻度、想起された風景の空間的構成要素、風景の関わり方にパターンがあることが分かった。最後に、構図と風景を見た時期の二軸で記憶に残っている風景の特徴を類型化した。

キーワード:風景イメージ, 記憶に残る風景, 原風景

1. はじめに

(1) 背景・目的

人は、日々の暮らしの中で何気なく風景を記憶している。その記憶に残っている風景は、必ずしも観光地のような非日常的な風景ではなく、幼少期の通学路や部活動を行っていたグラウンド、自宅付近の風景など日常的な風景が記憶に残っていることも多い。つまり、記憶に残っている風景とは、個人的な経験を通し、記憶に焼き付き、内面化された風景と捉えることができる。そのような幼少期や青年期のいわば自己形成期に住み暮らした土地の記憶に結び付いた風景を一般的に原風景と呼ぶ。原風景は、何気ないごく平凡な風景である場合が多いため、環境が変貌しやすく、自分自身を失ったような不安を感じるほど、個人にとって大切な風景であると捉えることができる¹⁾。しかし、このような個人的で日常的な風景を捉える手法は様々に試みられているが、記憶された風景そのものの特徴を明らかにする研究はあまり見られない。本研究は個人的な風景に着目し、その風景が想起された理由やその場所での思い出に関する記述を分析、風景を形作る構成要素等を抽出することで、記憶に残る風景の特徴を明らかにする。

(2) 研究対象

熊本大学の学部生への課題として出されたレポート、3

年分(平成30年度, 平成29年度, 平成28年度開講) 241個のデータを研究対象として取り扱い、レポートに記述されているスケッチ及び文章を分析していく。このレポートは、大学2年次の学生に対し、必修科目であり、初めての景観分野の授業である「景観工学」の導入として課されたものである。レポートを行った学生らは景観の初学者であるため、専門知識を有しておらず、これらのレポートは、日常生活での自然な風景発見の記述に近いものとみなすことができる。課題の内容は、自分の原風景(一番の思い出となっている身近な風景)を思い出し、その原風景を絵(スケッチ)と文章で、絵日記風に表現

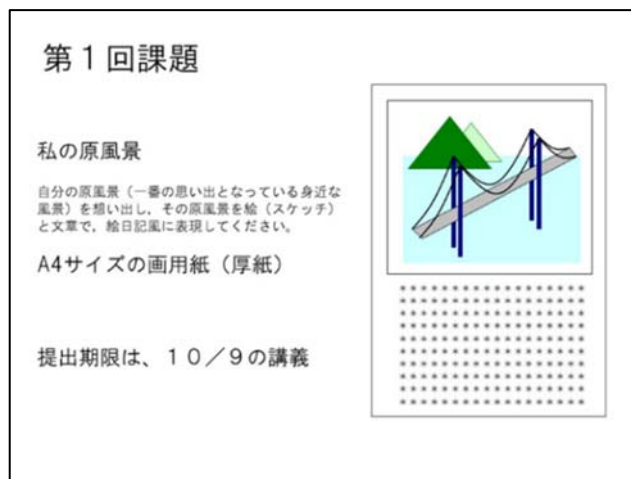


図-1 課題内容

表-1 記述者の出身地

出身県	総数	出身県	総数	出身県	総数
福岡県	76	佐賀県	8	岡山県	1
熊本県	53	山口県	7	沖縄県	1
大分県	26	大阪府	3	島根県	1
長崎県	22	京都府	3	鳥取県	1
宮崎県	15	東京都	3	不明	8
鹿児島県	10	兵庫県	3		

するというものである(図-1)。留学生のレポートに関しては、日本語能力によって課題の理解不足が懸念されるため、今回の研究対象として、5名の留学生のレポートは分析の対象外とした。241名の学生の出身地を表-1に示す。九州出身の学生が大半を占めていることが分かる。

2. 研究の位置づけ

(1) 個人的な風景に着目した既往研究

近年の原風景に関する研究においては吉村の研究²⁾があり、その研究では、被験者の居住歴や生活体験とその変化、原風景の想起状況とその内容、および原風景に対する態度強度などに着目した原風景の調査分析から、原風景の生成プロセスとメカニズムについて考察を行っているものである。本研究は、原風景の生成プロセスを捉える研究ではなく、被験者の記憶に残っている風景の様子や想起された経験及び感情に着目した研究である。ここに、吉村の研究との違いがある。一方、記憶に残っている個人的な風景に関する研究においては、堀ら³⁾や尾野ら⁴⁾の研究が挙げられる。堀らの研究では、記憶に残る風景を「印象に残った風景」、「なつかしさを覚えやすさぐ風景」、「思い出すのもいやな風景」の3つのキーワードにより喚起し、体験された風景の構造化を行っている。本研究では、記憶に残る風景を始めから類型化し分析を行うのではなく、「一番の思い出になっている身近な風景」という一つのキーワードから想起された風景の内容を分析した。ここに堀らの研究との違いがある。また、尾野らの研究では、個人的で日常的な「私の風景」についてアンケート調査から得られた被験者の属性を詳細に分析したものであり、本研究では、被験者から想起された風景そのものを分析の中心的な対象としている点に新規性がある。原風景に関する既往研究では、選択方式のアンケートによる分析がほとんどであるが、本対象のテキストは自由記述方式で書かれたものである。選択方式のように数値データではないので量的分析は困難であるが、自由に書かせることによって、分析者の想定を超えた豊かな情報を得る可能性があると考えた。

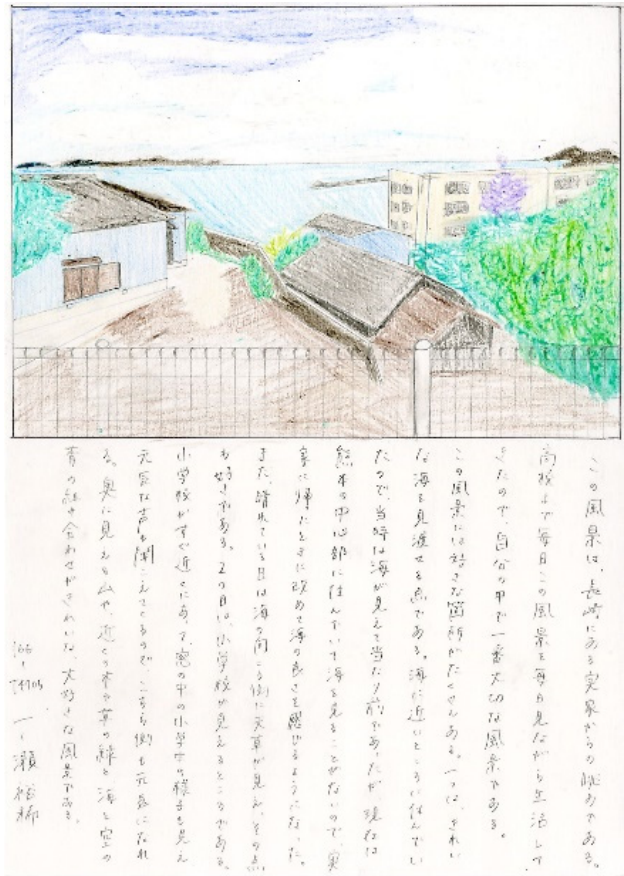


図-2 レポート一例

(2) イメージスケッチ手法を用いた既往研究

スケッチを対象とした研究では、上田⁵⁾や高瀬ら⁶⁾のイメージスケッチ手法を用いた研究がある。上田らの研究では、スケッチに色を付けず、想起された風景を簡潔に短時間で描き、インタビュー調査を通し、風景に対する情報を補足して研究を行っている。高瀬らの研究においても、スケッチは簡単に表現されたものを扱っていたため同様のことが言えるとともに、日常生活圏内の自然に着目し研究を行っていた。これと比較し、本対象は、提出期限を課題内容発表から2週間後としている。ある程度期限を長く持たせることで、その場所での出来事等を思い出させ、その後行う記述へ認識内容がより多く反映されることが考えられる。スケッチも同様に、想起された風景を形作る構成要素や、自らが想像した情景など、その風景に関しての様々な情報が詳細に反映されていると考えられる。その一方で、課題内容発表後から調べて得た、想起された風景の歴史や景観分野の知識が文章に書かれ、スケッチにおいては、想起された風景の写真を写したようなレポートも存在し、実際に想起された環境以上のものが含まれる可能性がある。しかし、内省の時間が生まれ、自分にとっての身近な風景を試行錯誤することで、短時間では思い出すことができなかつた幼少期の風景を思い出す可能性があり、想起された複数の風景

の中から吟味され、絞られた一つの風景がスケッチに描かれていると本研究では考える。

3. 研究方法

(1) 記憶に関わる認知心理学的方法

記憶の想起方法は、大きく再生と再認に分かれる⁷⁾。再生とは憶えこんだ情報を被験者自身が思い出すことを言う。再生には、思い出した順に自由に回答する自由再生と、暗唱などのように覚えこんだ順序通りに再生する系列再生、与えられたヒントを手掛かりに想起する手がかり再生などがある。再認とは選択式のテストのように、学習時に提示された項目と提示されなかった項目とを被験者に提示し、提示された項目を選択する方法である。

(2) エピソード記憶

研究対象であるレポートは認知心理学におけるエピソード記憶が表象されたものであると考えられる⁸⁾。エピソード記憶とは過去に起きた個人的な出来事や事象のことを言う。エピソード記憶を別個の記憶システムと捉えるものとその他の記憶システムにも依存していると捉えるものに分けられる。原風景の形成にはエピソードを裏付けする潜在的な記憶も寄与していると考え、本研究では、前者の独立した一つの記憶として位置付け分析を行う。

(3) 研究の枠組み

(1)、(2)に記した認知心理学における知見を基に、レポートからエピソード記憶を読み解くまでの流れを示したものが図-3である。レポート記述者は、講義で原風景の定義を知り、それを手掛かりに自分の記憶のなかから原風景と思われる風景を複数想起する(手掛かり再生)。その後、教授された原風景の定義と想起された複数の風景を比較し原風景を確定するものとする(エピソード再認)。

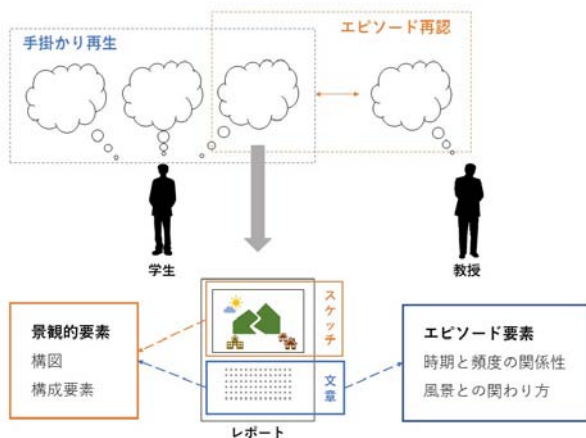


図-3 分析の枠組み

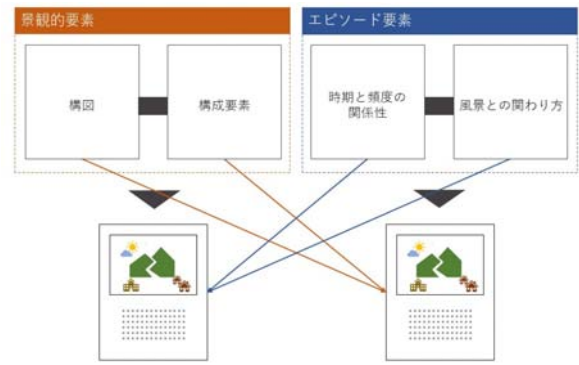


図-4 分析の構成

再認)。本研究では、想起された風景に関連するプロセスから得られた内容を景観的要素、エピソード的な検索から得られた内容をエピソード要素と定義し、この2つの要素から記憶に残っている個人的な風景を考察する。

2つの想起された内容とレポートのスケッチ及び文章との対応関係を整理する。景観的要素の分析においては、想起された風景はスケッチで表現されているため、文章も参照しつつ主にレポートのスケッチから分析を行う。また、エピソード要素の分析においては、「いつ、どこで」等の時間軸を含む記憶、その場所での思い出や感情を文章から抽出し分析を行っていく。

(4) 分析の構成

原風景として想起された2つの内容をそれぞれ分析し、そこから得た知見をレポートの具体例のなかで統合的に分析することで、多様性のある個人的な風景における環境の特徴を把握する(図-4)。

景観的要素の分析においては、まず、構図、構成要素の2つの分析をレポートのスケッチ及び文章から行った。その後、構図と構成要素の関係性を把握することで景観的要素の特徴を把握した。

エピソード要素の分析においては、まず、風景を見た時期及び頻度、風景との関わり方の2つの分析をレポートの文章から行った。その後、風景との関わり方の考察を時期と頻度の関係性を見つつ考察することでエピソード要素の特徴を把握した。これらの分析から景観的要素とエピソード要素の特徴を把握し、そこから得た知見をレポートの具体例から把握し直しつつ詳細な考察を行うことで、想起された風景の特徴を把握する。

4. 景観的要素の分析

(1) 構図

構図の分析結果を、図-5に示した。視距離の分割としては、主題として描かれた構成要素を文章とスケッチを見ながら判断し、上田⁹⁾の研究を参考に類型化を行った。

比較的小さな要素がスケッチを構成していたり、主題の要素が画面いっぱいに描かれるなど、対象との距離の近さが読み取れるものを「近景」、主題の要素が中距離に描かれており、水平方向から捉えているものを「中景」、主題の要素が背景に描かれたものを「遠景」、高所から見下ろした構図や、仮想的な視点から描かれたものを「俯瞰景」に分類した。構図では、全レポート241枚のうち、近景（162枚、67%）、中景（37枚、15%）、遠景（28枚、12%）、俯瞰景（14枚、6%）であった。近景が全体の6割以上を占めていることから、原風景として想起される風景は、環境の全体像を捉えた風景よりも、環境の詳細部分まで捉えた風景が多く、レポート記述者が直接取り巻く環境の方が想起されやすいと言える。

(2) 構成要素

構成要素の分析では、文章で具体的に情景の説明やその場所での思い出等が説明され、スケッチに描かれた構成要素を「主景」、文章において簡単に情景の説明がされ、スケッチに描かれた構成要素を「副主景」、文章において説明がされておらず、スケッチに描かれた構成要素を「添景」に分類し考察を行った。描かれた構成要素の分析結果を表-2に示した。人工物は赤色に、自然物は青色に配色し、主景、副主景、添景ごとに多い順に構成要素を並べている。これから、人工物と比較して自然物が上位に描かれていることから、自然物を想起した記述者が多い傾向にあると言える。主景に多く描かれた構成要素は、街路（39枚）、河川（30枚）、海（21枚）であった。街路が多く描かれた理由としては、小学校から高校生の時期における通学路を想起した記述者が多いということが挙げられる。2番目に多かった河川も通学路から見える河川を想起した記述者も複数いたことから、学生時代の何気ない風景体験を想起している記述者が多い傾向にあると言える。しかし、想起された構成要素を類型化すると30種類になったことから、原風景として想起された環境は各個人により異なり、多様性のあるものだと考えられる。

(3) 構図と構成要素の関係性

構図と構成要素との関係性について把握する。構成要素の分析より、想起された環境を形作る構成要素は、多様性があることが分かった。そこで、大枠として「自然」と「人工」に分類し、「自然」においては、山や河川などの構成要素を「地形」、樹木や岩などを「自然要素」、天候などを「自然現象」の3つに分類し、「人工」においては、街路や建物などの構成要素を「建造物」、自動車や人、動物などを「乗り物・人」、ガードレールやフェンス、ベンチなどを「その他」の3つに分類した。一方、構図の分析結果では、近景が162枚と全レポートの6

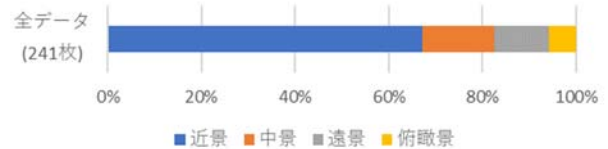


図-5 構図の割合

表-2 構成要素の類型化

主景	副主景	添景			
街路	39	建築物	29	樹木	136
河川	30	山	26	街路	85
海	21	天候	24	建築物	77
樹木	21	樹木	23	芝・雑草	58
田畑	20	街路	22	柵	58
橋	19	河川	16	天候	54
山	19	海	14	山	52
施設	17	橋	13	岩・石	30
建築物	16	乗り物	12	電線	28
天候	11	田畑	10	河川	24
遊具	8	岩・石	8	橋	18
校舎	7	森	8	ベンチ	17
神社	7	動物	8	海	16
乗り物	5	人	7	ガードレール	14
歴史的建造物	5	モニュメント	5	人	14
駅	4	遊具	4	乗り物	14
人	3	柵	4	街灯	14
広場	3	施設	4	モニュメント	12
湖・池	3	ベンチ	3	田畑	12
モニュメント	3	芝・雑草	9	鉄塔	11
岩	2	池・湖	3	森	10
動物	2	堤防	3	施設	9
港	2	看板	2	神社	8
時計台	1	島	2	遊具	8
土手	1	広場	2	自動車	7
トンネル	1	校舎	2	看板	6
バルーン	1	駅	1	手すり	6
風車	1	パネル	1	湖・池	6
ポスト	1	釣り竿	1	カーブミラー	5
		門	1	側溝	4
		側溝	1	標識	4
		ガードレール	1	マンホール	3
				時計台	3
				信号	3
				堤防	3
				点字ブロック	3
				動物	3
				テーブル	2
				駐車場	2
				島	2
				壁	2
				広場	2
				校舎	2
				その他	15

割以上を占めるという結果になった。そこで、近景とそれ以外の3つの構図を比較し、近景の特徴を考察する。その後、近景以外の中景、遠景、俯瞰景それぞれの比較を行うことで、3つの構図の特徴を考察する。

a) 近景とそれ以外の比較

近景とそれ以外の構図の比較を表したものを図-6に示す。近景と近景以外それぞれの主景における一番大きい割合を占めている項目から考察を行う。近景では、「建造物」が47%を占めた。これは、学校までの通学路や、校舎、神社等を描いている記述者が多く、主景に大きく描いているためだと考えられる。近景以外では、「地形」が41%を占めた。これは、河川や山を描いている記述者が多く、これらの河川や山などの地形は、遠くから見ても迫力があり印象に残りやすいものであると考えられる。つまり、視覚的に引いて見たほうが地形の美しさや風景

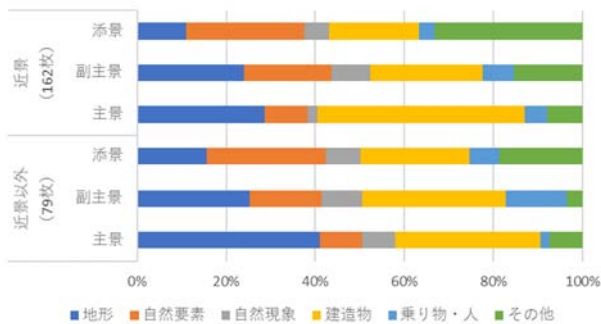


図-6 近景とそれ以外の比較

としての良さを感じやすいと言える。人工の「その他」を比較すると近景では、主景8%、副主景15%、添景33%に対し、近景以外では、主景7%、副主景3%、添景19%と近景以外の構図に対し、近景の方が割合が大きい。この結果より近景では、主景となる構成要素を大きく描いているため、周りの構成要素も詳細に描かれやすいという特徴があると言える。

b) 中景、遠景、俯瞰景の比較

近景以外の構図と構成要素との関係を図-7に示す。俯瞰景の特徴としては、「乗り物・人」の割合が中景及び遠景と比較して大きい。これは、展望所などの高い視点から風景を捉えているスケッチが多く、俯瞰的な視点から、周辺の都市の構造や、人や乗り物の動きを詳細に表現していると言える。また、スポーツの試合中継などにも俯瞰的な視点が用いられることから、スケッチにおいても自分や他の人のアクティビティを表現するために俯瞰的な視点が用いられていると考察できる。構成要素では「地形」が44%と大きい割合になっていることから、風景の器となる自然要素のなかに存在する人や生き物の動きを捉えた器とアクティビティの関係性が俯瞰景の特徴と言える。中景の特徴としては、「地形」において、主景35%、副主景25%であり、同様に「建造物」においても、主景35%、副主景25%という結果を得た。主景に河川や山を描いたときは、副主景に建造物を描いており、一方、主景に建造物を描いたときは、副主景に河川や山を描いてるのではないかと考えられる。つまり、中景の特徴としては、風景の美しさをスケッチに表現する際に、副主景に主景と対になるような構成要素を描くことにより、主景に描かれた構成要素を際立たせていると言える。遠景では、主景において「地形」が48%と大きい割合を占めた。これは、山を描いている記述者が多いためであり、副主景において「建造物」が48%と大きい割合を示したのも、中景の特徴と同様で、主景の山と対比となる人工物を描くことにより、主景を引き立たせているからだと考えられる。また、「その他」の主景と副主景がともに0%であることから、あくまで主景に描かれている構成要素しか記述者は見ておらず、細かな構成要素との比較は行っていないと言える。

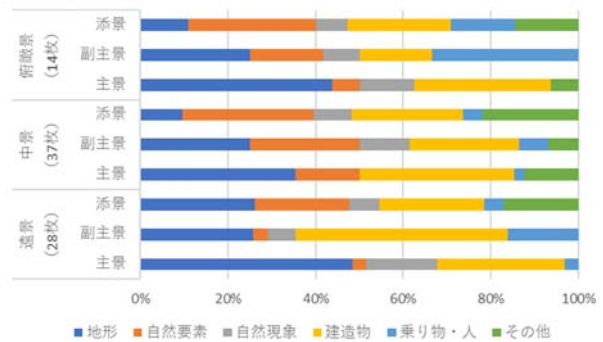


図-7 俯瞰景、中景、遠景の比較

5. エピソード要素の分析

(1) 風景を見た時期

風景を見た時期の分析結果を図-8に示した。風景を見た時期については、多い順に、現在まで見続けている風景が34事例、高校生のころにみた風景が30事例、小学生のころにみた風景が24事例という結果を得た。大学生のときに見た風景を想起した人よりも、幼少期から高校生のときに見た風景を想起した人が多い結果となった。これは、提出期限を課題内容発表から2週間後とある程度長い期間持たせたことにより、過去の記憶を思い出す十分な時間があつたためだと考えられる。また、幼少期に見た風景を想起した記述者が少ないことに関しては、一般に3歳以前の記憶であれば、記憶として残りにくいと言われており⁹⁾、幼少期の記憶を想起した人が少ないと考えられる。

(2) 風景を見た頻度

風景を見た頻度において文章から、想起された環境での出来事や行動の頻度を述べられている文章および想起された環境から頻度の多い順に3パターンに類型化する。「いつも」、「毎日」のような語が文章に書かれたレポートや地元の風景が想起されたレポートを『日常』、

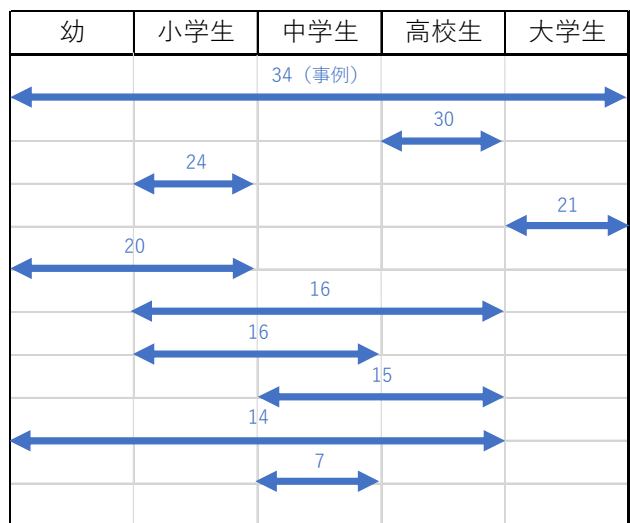


図-8 風景を見た時期

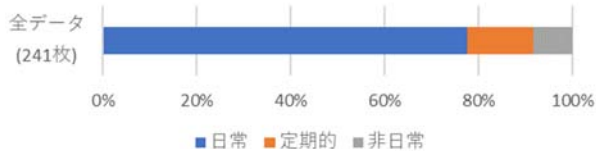


図-9 風景を見た頻度

「度々」、「たまに」のような語が文章に書かれたレポートや祖父母の家などの風景が想起されているレポートを『定期的』、「一度」などの語が文章に書かれたレポートや旅行先の風景が想起されているレポートを『非日常』に分類した。その結果が図-9である。全レポート241枚のうち、日常（187枚，78%）、定期的（34枚，14%）、非日常（20枚，8%）であった。「日常」が全体の7割以上を占めたことから、風景を見た頻度の高い環境ほど想起されやすい傾向にあると言える。しかし、「非日常」の風景を想起した記者者もいることから、ほんの数回見ただけで印象に残るような風景が存在すると言える。

(3) 風景を見た時期と頻度の関係性

風景を見た時期と風景を見た頻度の関係性を考察するために、風景を見た頻度において風景を見た時期がそれぞれ何割程度存在するかを示した図を作成した（図-10）。風景を見た頻度から比較検討すると、「日常」では全体的にどの時期からも想起されているが、大学生の時期に見た風景が少ない。これは、大学生になり環境が変化することで、地元の風景に関わる頻度が減少しているためだと考えられる。「定期的」では、中学生と高校生の時期に見た記者者が存在しない。これは、「定期的」に分類したレポートのうち祖父母の家やその周辺環境を描いたレポートが多く占めており、このことから、中学生から高校生にかけて祖父母の家において印象に残るような経験が減少していると言える。「非日常」では、高校生と大学生の時期に見た風景が大きな割合を占めていることから、高校生と大学生の時期に環境が著しく変化し、行動の幅が広がり、非日常的な風景に触れる機会が増加すると言える。

(4) 風景との関わり方

風景との関わり方においては、文章を読み取り、文章を「A：風景の紹介」、「B：風景として思い出す記憶の内容」、「C：風景の解釈」に分類した。「B：風景として思い出す記憶の内容」及び「C：風景の解釈」をそれぞれKH Coderを使用し、共起ネットワーク図を作成した。これから特徴的な語の共起関係を見ることで、風景との関わり方の考察を行う。「A：風景の紹介」は、経験や思い出等といった心理的要素ではなく、構成要素や想起された場所などの説明であり、物理的要素の特徴

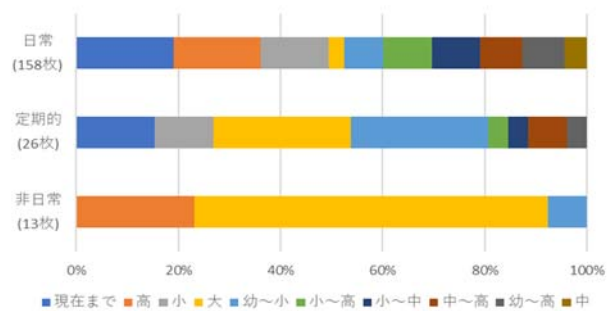


図-10 風景を見た時期と頻度の関係性

の把握は3章において取り扱っているため、分析の対象外とした。

a) 風景として思い出す記憶の内容

風景として思い出す記憶の内容をKH Coderを使用し、共起ネットワーク図を作成したものを図-11で示す。「好き」、「帰る」の共起関係から大学生になり、過ごしていた環境が変化したことで地元の風景が好きになったということが考えられる。これは、吉村の既往研究においても「風景とは一般に以前の風景との対比により生成される」と述べられており、今回のレポートからも確認することができた。「小学生」、「中学生」、「高校」の共起関係を見るとそれぞれ「遊ぶ」、「部活」、「通学」の強い共起関係がある。このことから、それぞれの時代における日常生活が想起された環境と深く関係していると言える。「小学生」、「遊ぶ」の共起関係にさらに着目すると、小学生時代においては、遊んでいた場所が印象に残りやすいと言える。ここで、図-10を見返すと小学生の時期に見た風景の頻度は「日常」11%と「定期的」9%と同程度の割合であることから、日常から少し外れた体験も「遊ぶ」という行為とともに原風景の形成に影響していると言える。また、日常から少し外れた環境には祖父母の家が挙げられ、3節の分析結果で述べた中学生から高校生にかけて祖父母の家において印象に残るような経験が減少しているという考察を踏まえると、小学生時代は遊び場として利用していた祖父母の家が、中学生になると部活動に打ち込む時間が多くなり、遊び場として利用することがなくなったと言える。

b) 風景の解釈

風景の解釈をKH Coderを使用し、共起ネットワーク図を作成したものを図-12に示す。「帰省」、「懐かしい」の共起関係から想起された風景は地元へ帰省した際に、懐古感を感じさせる風景が多いと言える。また、「自然」、「建物」の共起関係、「空」、「緑」、「海」の共起関係から想起された環境は、風景との調和や対比が行われているもの、自然の広がりを持つ風景ほど想起されやすいと言える。「変わる」、「季節」、「桜」の共起関係からは、季節による風景の表情の変化を楽しむ記者者が多いということや、桜が特徴的な語として抽出さ

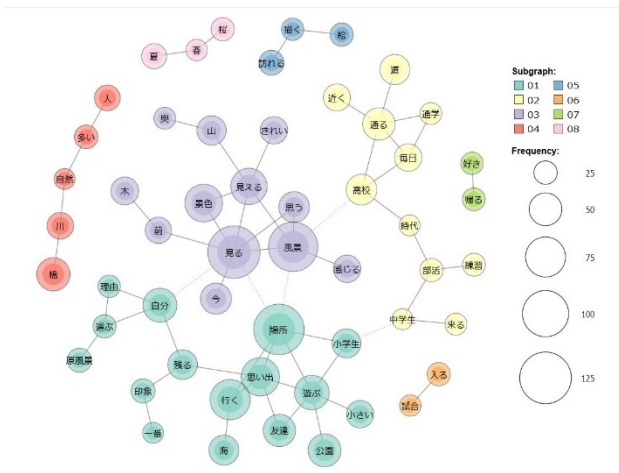


図-11 風景として思い出す記憶の内容

れていることから、春は年度の初めであり、入学や進級などで環境や立場の変化が大きい季節であるため、それと付随して風景も印象に残りやすいのではないかと考える。「家」、「見える」、「好き」の共起関係からは、家から見える風景を記憶する特徴がみられ、これは吉村²⁾の既往研究において「原風景の中核に「家」が存在している」と述べられており、本研究においても、その特徴を確認することができた。

6. 具体例の把握

6章では、景観的要素の特徴が明快なレポートをエピソード要素の側面から考察し、エピソード要素の特徴が明快なレポートでは景観的要素の側面から考察を行うことで、具体例から二つの要素の関係性を把握する。景観的要素の考察では構図を、エピソード要素では風景が想起された時期を枠組みとして具体例を提示する。

(1) 景観的要素の具体例

a) 近景

近景の特徴としては、主景となる構成要素以外の要素が丁寧に描かれており、詳細に想起された環境が表現されていることを特徴として挙げた。近景は俯瞰景、中景、遠景と比較して枚数が大幅に多いことから3パターンに分類した。

一つ目は、主景となる構成要素を画面全体に描いたものである。これは主景となる構成要素のみの魅力を表現したと考えられ、迫力のある構図が特徴である。図-10における風景を見た頻度が「非日常」、風景を見た時期が「高校生」および「大学生」に分類されたレポート12枚のうち8枚がこの構図で描かれていた。具体的なレポートを見ると、旅行先の風景を捉えるものが多かった(図-13)。つまり、図-10の考察における、高校生と大学生の時期に環境が著しく変化し、行動の幅が広がり、

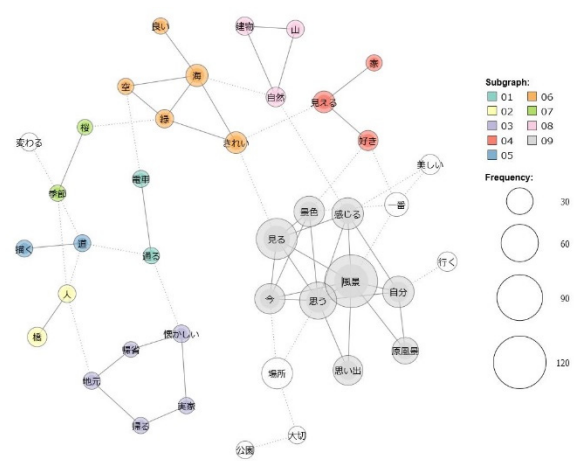


図-12 風景の解釈

非日常的な風景に触れる機会が増加するという結果と関連していると言える。

二つ目は、街路から見える風景を描いたレポートである(図-14)。図-11から考察すると、「道」、「通る」、「近く」の黄色に配色された共起関係のグループと、「見る」、「景色」などの紫色で配色された共起関係のグループが異なることから、これらのレポートは、ある特定の場所から見た風景ではなく、シークエンス景観に近いものであり、「通る」、「近く」の共起関係より、街路を通るなかでの周辺の様子にも注目しているのではないかと考える。つまり、ある一つの視点場からの眺めというよりは、シークエンス景観のなかの一点を描いたものであり、連続性のある風景を見た過程を得て、そのなかで最も印象に残った風景を描いているのではないかと考えられる。

三つ目は、実家から見える景色などのいつも見てきた何気ない風景を想起したレポートである(図-15)。図-12の「家」、「見える」の共起関係より、「見る」のような能動的な行動ではなく、家から「見える」という受動的な行動が共起していることから、特別な瞬間を切り取ったような風景ではなく、自分が存在した場所であり、今も変わらず残り続けている風景と捉えることができる。つまり、季節や天候によって表情が変化するときの一点を捉えたものではなく、何気ない日常を送るなかで見続けてきた風景であり、時間的な連続性があると言える。

b) 俯瞰景

4章の分析結果より、俯瞰景は風景の器とアクティビティの関係性があることを示した。この特徴を含むレポートを見ると仮想的な視点から描かれており、記述者が長い期間暮らした都市の構造を捉えていると言える。また、散歩している人や、車道を走る自動車などのアクティビティの様子も見られる(図-16)。俯瞰景のレポートのうち、図-9の分析において「非日常」に分類された



図-13 近景の具体例



図-14 近景の具体例



図-15 近景の具体例



図-16 俯瞰景の具体例

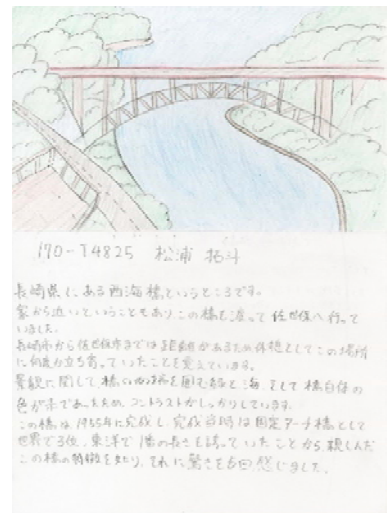


図-17 中景の具体例

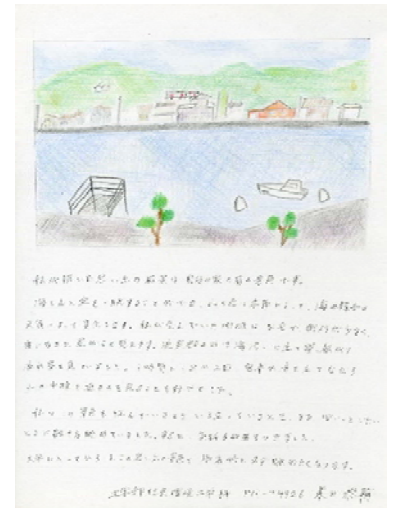


図-18 遠景の具体例

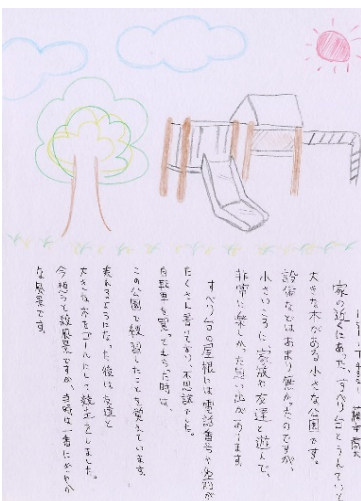


図-19 幼～小の具体例

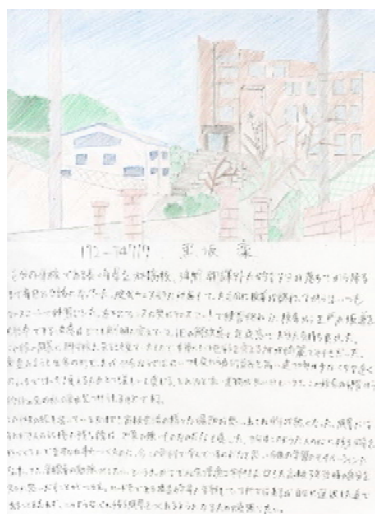


図-20 中～高の具体例



図-21 中～高の具体例

ものは少なく、「日常」、「定期的」に分類されたものが大半を占め、頻度の多いものほど俯瞰景で表現されやすいと考えられる。「非日常」に分類されたレポートは、観光地の展望所からの眺めであり、大学生の時期に見た風景であった。これより、俯瞰景で描かれたレポートは、想起された環境を仮想的な視点から、自分が長年住み続けてきた都市の構造を、記憶に基づき説明しているものが多い傾向にあると考えられる。

c) 中景

中景の特徴としては、構成要素をバランスよく配置したり、構成要素同士を比較することで風景の美しさを表現していることを挙げた。これは、図-12の考察の風景との調和や対比が行われているもの、自然の広がりを持つ風景ほど想起されやすいという分析結果に関連していると考えられる。具体的なレポートでは、橋梁を描いたレポートが多く抽出された(図-17)。橋梁が多く抽出された理由としては、河川と橋梁を比較することで風景としての美しさが生まれることや、遊び場や視点場としての利用など多機能な一面を持つためだと考えられる。これらの考察は、図-11においても、「橋」、「川」の共起関係が見られることから、人工物と自然物の対比を行っていると言え、スケッチにおいて、水面に映る橋の美しさを表現したレポートも複数存在したことで、図-12において「橋」、「人」の共起関係から、通学路などの利用や遊び場などの人が集まる場所であるということを確認することができる。

d) 遠景

遠景の特徴としては、あくまで背景に描かれた主対象しか見ておらず、前面に存在する構成要素との比較はしていないということを挙げた。その特徴を含むレポートとしては、主対象として山を描いたものが多く存在した(図-18)。これらから遠景は、自身の意欲的な行動によって記憶した体験された風景ではなく、無心で眺めていた風景だと言える。また、文章より「リラックス」や「落ち着く」などの言葉が多く表現されていることから、安心感を想起させる風景と考えられる。これは吉村の研究において、原風景は、心のよすがを支え、安定感・安息感の源と捉えることができると書かれており、本研究でもその知見を確認することができた。図-11をみても、「奥」、「山」、「見える」の共起関係からも背景に映る主対象の山のみを見ていることや、「見る」ではなく「見える」と共起関係にあることから受動的な行動を伴う風景であり、無心で眺めている風景であることを確認することができる。

(2) エピソード要素の具体例

エピソード要素の具体例では、幼少期から高校生のときに見た風景を想起した人が多いという結果より、幼少

期から小学生の頃に見た風景と、中学生から高校生の頃に見た風景の2つに分類し考察を行う。幼少期から小学生の頃に見た風景では、「小」に分類した24枚と「幼～小」に分類した20枚を合わせた計44枚、中学生から高校生の頃に見た風景では、「中」に分類した7枚、「高」に分類した30枚、「中～高」に分類した15枚の計52枚を対象とした。

a) 幼少期から小学生の頃に見た風景

図-11の考察より、幼少期から小学生の頃に想起された環境は、風景というよりも遊んでいた場所であるということが特徴であり、レポートをみても44枚中13枚が、幼少期に遊んでいた公園を想起していた(図-19)。また、想起された環境のほとんどが遊具と樹木があるだけの小さな公園であり、13枚中9枚がスケッチにおいて「近景」で描かれていた。これより、4章の構図の考察を踏まえると、幼少期では自身を取り巻く場が想起されやすい傾向にあり、現在では遊び場として利用することはなくなったが、幼少期の記憶を思い出す特別な場所だと言える。文章では、殺風景に見えるが個人的に大切にしている場所、現在では環境が変化してしまい、もう二度と見れなくなり残念な気持ちになったという心情が読み取れる。これは、図-12においても「公園」、「大切」、「場所」の共起関係からも確認することができる。これから、幼少期から小学生の頃に見た風景は、環境の変化を受けやすいものであり「幼少期を思い出す素朴な遊び場」が多い特徴がある。

b) 中学生から高校生の頃に見た風景

図-11における考察の「中学生」、「部活」の共起関係や「高校」、「通学」の共起関係より、中学生から高校生のころに見た風景は、学校生活が深く関係していると言える。中学生から高校生の頃に見た風景に分類した52枚のレポートをみても、母校(図-20)や中学生や高校時代に利用した通学路など想起した環境は様々であったが、52枚のうち40枚が学生生活に関係のあるレポートであった。図-21は浪人時代に利用していた駅を描いたレポートであり、中学生から高校生の頃に見た風景の中核には「学校」が存在することが言える。学生生活に関係性のあるレポート40枚のうち29枚が「近景」で描かれていることから、自身を取り巻く環境を想起されやすい傾向にあり、幼少期から小学生の頃に見た風景と同様に「眺める風景」というより、「体験された風景」であると考察できる。想起された感情には、「今の私を作った場所」や「ターニングポイント」等の言葉が想起されており、中学生から高校生の頃に打ち込んだことを思い出し、中学生から高校生の頃に見た風景は、「学生生活を色濃く映し出す場」と言える。これは吉村²⁾の研究において、原風景は、自分の現在を根底で支える大切なも

のとしても捉えることができると書かれており、本研究でもその知見を確認することができた。

(3) まとめ

6章の考察結果を、図-22に示し、構図と風景を見た時期の関係性においてそれぞれ特徴があることを明らかにした。図は、レポートの枚数に応じて枠の大きさを変えており、構図では近景で表現されたもの、風景を見た時期では、幼少期から高校生の頃に見た風景が大半を占めていることが分かる。本研究の成果として、過去の原風景や個人的な風景に関する知見を網羅的に示すことができたと考える。

近景の特徴として、幼少期から小学生の頃に見た風景は、それらの場所は現在は利用していないとしても幼少期を思い出す大切な場所であることや、環境の変化を受けやすい場所であることから「幼少期を思い出す素朴な遊び場」と捉えることができる。中学生から高校生の頃に見た風景は学生生活に打ち込んだことを思い出し、現在の自分を形成した場所だと言え、「学生生活を色濃く映し出す場」と捉えた。高校生から大学生の頃に見た風景は、環境が変化することで、行動の幅が広がり、非日常な風景に触れる機会が増加することから、旅行先での風景が多い傾向にあった。幼少期から高校生の頃に見た風景は、2パターン存在した。一つ目は、ある一つの視点場からの眺めというよりは、視点が動くことによる時間性をもつ風景が想起されやすい傾向があることを示した。二つ目は、何気ない日常を送るなかで見続けてきた自宅の風景が多く想起されており、季節が変化することによる長期的な時間的な連続性がある風景を捉えていることを示した。

俯瞰景の特徴としては、幼少期から高校生の頃では、自身が長年住み続けてきた都市の構造を捉えているものが多い傾向にあり、大学生の頃に見た風景は観光地などの展望所から眺めた風景と捉えた。

中景の特徴としては、構成要素同士のコントラスト、調和を重視しており、その中でも「橋」が描かれているものが多い傾向にあると言える。

遠景の特徴としては、山などの地形が多く描かれており、風景を受動的に無心で眺めているものが多い傾向にある。

7. おわりに

(1) 結論

本研究は、日常的な風景発見が書かれたレポートを対象に、記憶に残る風景の特徴を明らかにし、多様性のある個人的な風景の傾向を捉えることを試みた。その際、



図-22 記憶に残る風景の類型

レポート記述者は、課題内容発表から自分にとっての原風景をイメージし、そこから想起された環境をレポートに表現するものと仮定し、原風景として想起された内容には、景観的要素とエピソード要素が存在すると考え分析を行った。

まず、景観的要素の分析においては、構図、構成要素の2つの分析をレポートのスケッチ及び文章から行い、近景、俯瞰景、中景、俯瞰景の特徴を明らかにした。エピソード要素の分析においては、風景を見た時期及び頻度、風景との関わり方の2つの分析をレポートのテキストから行い、KHCoderで作成した共起ネットワーク図と風景を見た時期と頻度の関係性から考察を行った。

その後、景観的要素の特徴を含むレポートをエピソード要素の側面から考察し、エピソード要素の特徴を含むレポートでは景観的要素の側面から考察を行うことで、具体例から二つの要素の関係性を把握した。近景においては、幼少期から小学生の頃に見た風景は「幼少期を思い出す素朴な遊び場」、中学生から高校生の頃に見た風景は「学校生活を色濃く映し出す場」、高校生から大学生の頃に見た風景は「旅行先」、幼少期から高校生の頃に見た風景は、通学路などの「視点の変化による時間性のある風景」と自宅からの眺めといった「季節の変化による時間性のある場」が多いという特徴を明らかにした。俯瞰景においては、幼少期から高校生の頃に見た風景は、「まちの様子を一望できる場」であり、大学生の頃に見た風景は、展望所などの「観光的な眺望」が多い傾向にあることを示した。中景は「構成要素のコントラスト、調和性のある風景」、遠景では、「無心で眺めている風景」をとし特徴を明らかにした。

(2) 今後の展望

今回の研究では、被験者から想起された風景そのものを分析の中心としたが、尾野らの研究のように、出身地などの被験者の属性の影響は無視できないものとする。今後はそれらを考慮した分析も必要であろう。また、今

回の研究では記憶に残る風景の基礎的知見を得たと考えている。しかし分析対象としたレポートは、研究用に設計されたものではないため、記憶に関する理論に基づいてデータ収集法の再設計を行い、本研究で得た知見の検証および深化を図ることも有用であると考えます。

参考文献・補足

- 1) 篠原修編：景観用語事典，彰国社，pp.12-13,1998
- 2) 吉村晶子：原風景の生成に関する研究，ランドスケープ研究 67(5)，2004
- 3) 堀繁，栗原正夫，篠原修：体験された風景の構造，造園雑誌 Vol51，No.5，pp.287-292,1988
- 4) 尾野薫，堀江美穂，山中英生：「記憶に残る風景」のイメージスケッチ，景観・デザイン研究講演集 No.15，2019
- 5) 上田裕文：風景イメージスケッチ手法の構築に関する研究，日本都市計画学会 都市計画論文集，No.44-3，2009
- 6) 高瀬唯，劉成玉，古谷勝則：風景イメージスケッチ手法による日常生活圏内の自然を対象とした風景体験の類型化，ランドスケープ研究，Vol.11，2018
- 7) 道又爾，北崎充晃，大久保街亜，今井久登，山川恵子，黒沢学：認知心理学 知のアーキテクチャを探る，株式会社 有斐閣，p.166
- 8) M.W.アイゼンク：認知心理学事典，新曜社，pp23-25,1998
- 9) 心理学の教科書・基礎からの心理学
<https://psychology-effect.com>（令和2年2月2日閲覧）
(以上)